

バグウォッシュ精神の躍動を

バグウォッシュ協議会主催、湯川記念財団後援の第二十五回バグウォッシュシンポジウムは、国立京都国際会館で五日間にわたる討論を終り、一日夕「総括報告」を発表して幕を閉じた。

京都シンポジウムの主題は「完全核軍縮への新しい構想―科学者および技術者の社会的機能」であった。十五カ国一団際機関から参加した三十一人の科学者らが、慣例によって非公開で、率直に討論

を展開した。国際会議につきものの演出は一つなく、国旗すら一本も掲げられなかった。カナダの一寒村バグウォッシュで、一九五七年七月、第一回の「科学者と国際問題に関する会議」が催されて以来、参加者は特定の団体や国を代表するものではなく、自分自身の良心だけを代表するというのが建前だからである。

組織委員の一人、湯川秀樹京大名誉教授が、開病の身をおして立った開会のあいさつは、いわば京都シンポジウムの基調宣言であった。湯川博士が強調したのは「シンポジウムを意義あらしめるために、まず二十年前のラッセル・アインシュタイン宣言の精神にもとどるべきだ」という、初心への回帰であった。

ラッセル・アインシュタイン宣言は、われわれ自身の存続のため、戦争の否定と核兵器の廃絶が不可欠だと説き、その実現を目指して科学者の国際会議開催を呼びかけたものである。この中で示された「われわれは人類に絶滅をもたらすのか。それとも人類が戦争を放棄するのにか」という基本的課題が、まさにバグウォッシュ会議の原点と言えるであろう。

ところが、各国の核開発責任者や国際、戦略問題の専門家の参加が増え、討議内容が総論から各論へと具体的に重なり、ややもすると二次的な問題に重心が移り、また非公式な政府間接触の場ともなっており、発足当初の新鮮な理想主義は後退してゆく。

被爆三十年にして初めて日本で開かれたシンポジウムに際して、日本側組織委員が力点を置いたのは、何よりも新鮮な理想主義の復活ではなかったか。軍縮を技術的に口先で言うだけではなく、いかにしてそれを表現するかという気迫に満ちた精神が、バグウォッシュ運動の活力の源泉だからである。

さて、五日間の討論は有効であったろうか。バグウォッシュ協議会議長代行のロートプラット・ロンドン大学教授は、こう評価している。「第一回からすべて参加したが、今回の精神的な討論は最高の部類に入る」と。

総括報告は、第一章で「核抑止論の誤り」を厳しく追及し「もはや、その妥当性を失った。デタントと無関係に恐怖の均衡を維持することが目的になる」と、その無効と危険性を指摘し、核抑止論を完全に否定したことが目立つ。

第二章は「核兵器の不使用」を論じ、これは満場一致で同意された。「非核保有国に核攻撃をせぬ」という誓約が、核軍縮への第一歩だとする議論の白熱は興味深い。朝鮮半島での核使用の可能性が言われたのは、つい最近のことである。

第五章で「科学者の社会的責任」を検討する。「秘密を伴う仕事は拒否し、研究成果を自由に公表する権利を主張すべきだ」とし、医学の父「ヒポクラテスの誓い」にまでさかのぼって「医師たるも、人を傷つくべからず」の倫理は、科学者にも妥当するとされた。

バグウォッシュ運動の効果を、性急に期待すべきではなからう。われわれは、核爆弾の数をかぞえるよりも、平和への道に関するアイディアの数をかぞえたい。人類は「知性人」と称される。人類が存続するため、いかなる道をとるか。行くべき方向は、おのずから明らかであろう。

c092-17-012